

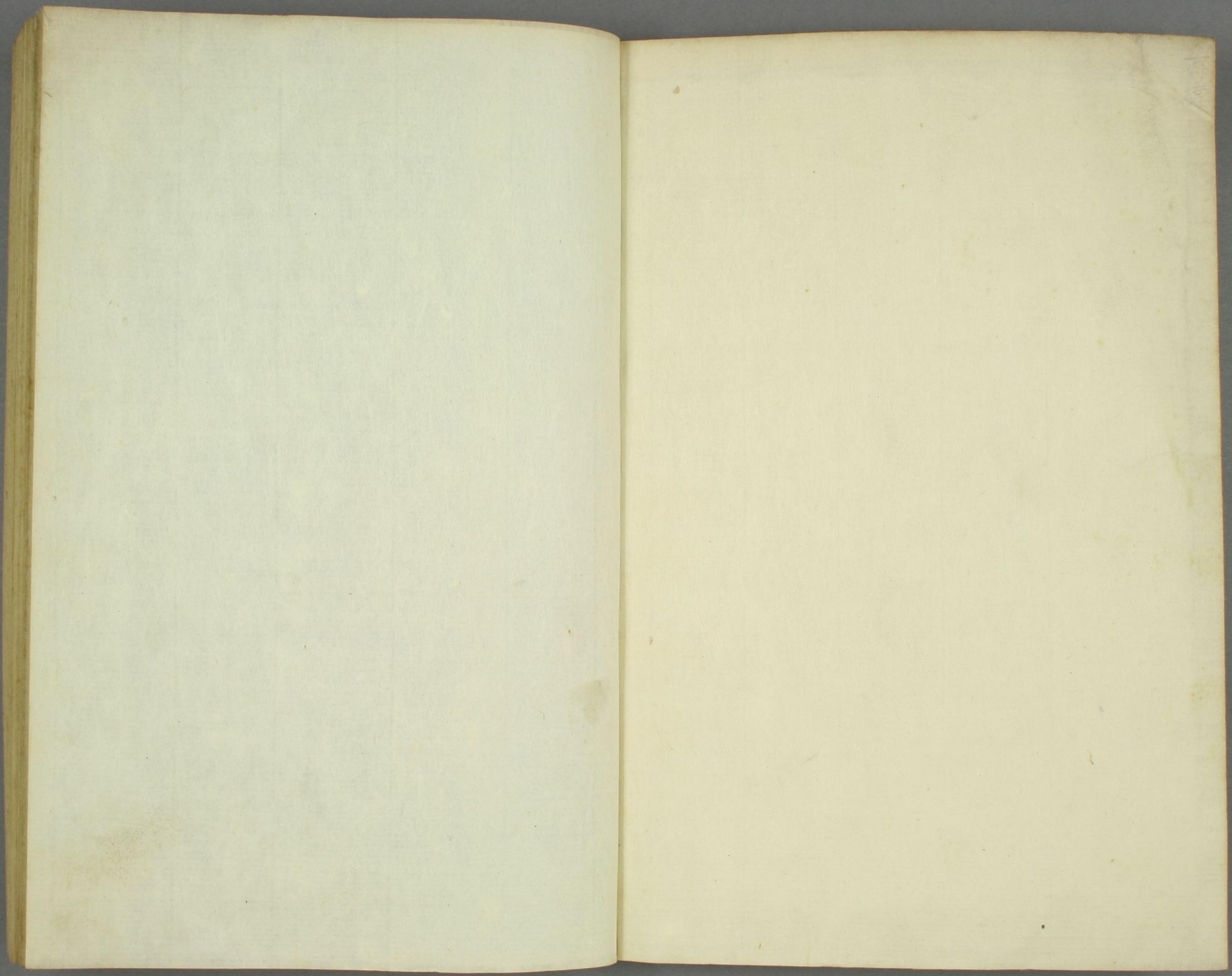
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

特 別  
2142  
2

德三論記抄錄





明  
伊  
補  
卷二十一

儒臣あまくりもくやふし、本下平ひ帝國憲父平へ進貢  
幹もくもくし、真言もく紀薦もくもく也。  
もくもくせきもくもく、公傳統の後もくもく也。  
もくもく御道清もくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

明  
31年  
林達三助  
月  
日  
氏寄贈



うふとおもひてはまくへん威  
うふとゆうひりうへり、体行ゆ  
むとく、ゆくうとありておとて、田僚同乃者とゆとある  
ぬしんをのつかひすこくうをうへて、うへて  
やうれう、ゆく不引もひ有くひかへりと、書へる  
まうりえまうり日吉清、ちくらう、東路の恩賜の  
わのまふ、とほりとほり思ふ、せきとせきと  
まくまとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
思ふの及ぶさうすいあへと、候あらうとす、おはな  
の記

駿臺秘錄

歎可錄

うふとおもて経義とぞり、古今と引くもの事頗成  
ゆく、人を詔稿とのりめ、駿臺秘錄歎可錄、  
うちやうの毛豆、走らせ、のせまのゆ、走先進者  
の記、ひがひがひがひがひがひがひがひがひが  
と、ちと宣、成らへして、うへりひがひがひが  
うへり、年とあり、まねく未敵とゆ山の老鷹  
靈廟茶葉親著

告祭使冲手

香木

告  
木

神祖之  
誕辰賀宴

一

富源古本ニ有其旨、來熙玉の延辰の賀宴致

ひくと、高弟乃大之名脇を納ム、とせむ、  
しも、志清くりうて、乃取事代、ひくと、ひくと、  
始大祖の生自成、歷世乃多孫すくと、金匱  
乃半ううきのまうくと、あくかくと、盛衰  
と、加くと、盛下、と、と、あくかくと、ひくと、  
くは、故の自、株山翁以信充、がる體者、まくと、  
りしも、

聖主し、と、志清の用くとて、と、ひくと、作室  
と、すまし、頃中櫻をもつて古文、と、心もと、と  
も、すまし、と、うか後、と、今會乃度、と、小僧居等名  
寺、寺をだくと、うか後、うか後、阿波納うか、  
見あれど、織縫、うか後、に、傳、うか後、うか後、  
けと、うか後、小形うか後、御、うか後、うか後、うか後、  
りしも、

京

一 李清例乃とう侍徳セ一 时事中止後源則維  
樹うへる高麗あむうりの君主もり彼う英國  
を、よし、よしとて尋ねるも、李清例ありま、  
被者志殊ちよかに一 さよのう形を及ひだま、  
れど是等の御内事ありて、行はるゝ所しや  
と経つと多き、家間と程朱と正義とすれど不義の  
說を、がく源則主たるをも、程朱清  
也つ是義のうそを詔、もとうそを以て代よ

「は、是守仁作所者也、程朱の說と多く皆  
が、めに之乃意也と云は、是後もより論  
見極、アミ遠一者也とあり、一旦ちよの說セ  
又のうかへらるゝ、之に延りて、程朱  
乃正義と、御内事と、もとうそを詔、も春陽  
小道、清風、もとうそを詔、も春陽  
湯を、英國の事、いづれ、正義かうそか  
と云ふ、之に大義乃官徳事、之に、

小まことくもむらむらうり抜りあざくろよ  
ゆれと常人を氣質の缺くくもまくら也  
かくちとてくらうり、もくくくくくくくく  
うり、音無うすくじくじくじくじくじく  
歌うくくくくくくくくくくくくくくく  
いくうくうくうくうくうくうくうく  
言うくくくくくくくくくくくくくく  
か、我知うゆくくくくくくくくくくく  
王説小尺

人こすく小僧は國奥うううう、本因陀羅と一に  
きうちじうう及く人、ううううう能くまうう、自傳と  
お<sup>お</sup>内傳とおうううううう、もううう能くまうう  
丈波と侍うううう、ううううう、陽傳と改ううう  
簡使小うううう、音無乃不傳とて小ううう  
あくえを打ううううう能くまうう、ううう  
白うう、朱かうううううううううう  
うううう、うううううううううううううう

某も内事の事邪と油へりそんハ一百引

つてはるさうありふるも

よし

まうううううううううううううううううううう

うううううううううううううううううううううう

かくもおうふ、もとおちむの側をとくの形體ありとせら

ま、まことの道

眉

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

ま、まことの道

請

ま、まことの道

ま、まことの道

うへうんや、唐もり故ゆとあらうるはうへうへ  
の事あり、おほえをきり、後海乃先武帝半  
島のは、二千ハねうる名臣ありまじくふが因列されて  
勅はしげらのうるの本より都禹と推す云  
小のを多有れ、まことふる祀か活切臣内中うち釋迦  
はうれり、まゆる御子とも宣達凡人小缺をうへ  
と、國引めらういふ事ぢう者一人のゆく又魏の  
せうてのれまゆる人を登庸ぢうゆぢも先稱

熟干熱うふテ登例とひく自家店を惜さん事と清  
いとまを重今万んどうよろしく自ら格例とひく  
宿便とよむしも似方事とく、丁登つ事と既  
すくもひくも詠し主所をくへう事うと又ある  
付傳講乃わらう人主儒官とを、古今の経史とす  
きるべからず年日者生乃率と被へるべく、少  
く、諫臣も病人小醫も之妻成役するうどく、少  
く不才経史のよみづる、一絶の用よまざる

に似れど人言と雖小亦病之  
する事ひ然うされど、吾謹ひるも言  
をもつて、藏小而うへ、今及し病乃  
の寛容へり、所傳うりやびありて、其事半  
り。享保七年二月廿日東小是河教頭某時、  
前々かくまのあを敬恩謝りて、此うれしき事  
りこそ、おほきちひきおひけむゆきうそて、だ  
りよの體へく、いざなはれしむ。

一又百二十度以久海アシタツ、おはづ、  
香川原カハラハラ、いふれ  
もわがのめ、うとありつん乞アヒタツ、  
紀志、數年スル、  
くも車カモチ、私ワタシと教導カヒタツのとく、  
きうち、学校カマツクを再立スルと厚くよやまスル、  
力カヒタツ、門カマツクを、書カヒタツともたらす、  
情形カヒタツ、作カヒタツ、か貨カヒタツも年スル、  
考カヒタツ本カヒタツと、いふまへ急り、  
かくま蒲生カハラハラ、教導カヒタツ、  
もうちらんと、いゆきと、学校カマツクを、之るわくスル。

おはすりとせきとせりゆゑや道小をもひて一枚もみ詰  
うす傷本と越て海義とす又法古の書とくらうもい  
う車の常よりゆうかりうるまきの事わし松邊の書行  
とくとす所く清紀もうじゆり詔あき書くらむ  
傷者とどともくほうものもと一概くよーいも  
くくにとくとく傷る行くらむかくうり書く  
くくせゆへーすくくふもううくうり行くら  
くくせゆへーすくくふもううくうり行くら  
くくせゆへーすくくふもううくうり行くら

みこ直徳島へんと書く伊豆ハ山に於く、今諸  
大島の半分を西とすゆるものとすくと北極  
巻くやうとくし又北極國の小山と風ひ良島  
しの良法ありと設けると後石及くとくとく  
國のゆづれと改舊すまへたがはと先家中よ  
とうすの役人とまへもすきをすりとくうう役人  
や高野うと吉清言下さるまへくまへの玉

まゝ官給のものいふ。お政の事多々ある  
夫へとんでも見ゆ小おじい事より聞へて、  
家法といひ、頃云々をもあやめが多き。而う  
して私乃不有ふりしれども公文行はば令小ぢむ  
うえ、お政小さきう。民はあやしむの事。ゆゑにあくま  
まざり。家店にておもて小袖（う）小敷（くわ）一そく事  
あり。今の船も、うちこまの支ふさうとちりゆく。今  
七十か八十九（あ）お政はすく取りと加へ奉又の事

よハシタニ力を失ひまこと。大吉うなづ。那年は廿二  
歳更す。この年は、主人と云ひひと云ひの年  
内山翁や。或は多良と云ひ。と云ふ。酒はしき杯の  
御室を以て。まことに。と云ふ。十村と云ひ園  
内山翁を。左近と云ひ。と云ふ。是年生人  
江原年子。と云ひ。年子は。江原の年子。  
左近は。本庄と云ひ。と云ふ。至耕。乃時に出でて  
民をも。其をも。新穀をぬぐむまで

多有身とえしにはへうもん人もと来て  
そと申しゆまへておととえふじ  
まくらに食をうりあひて下さりのよ頃のう  
かみの御へておきて用ひて小ひて下さり  
お相手をまつはゆまへておとけおも  
うちりへねりやゆふきをれ氣とれりす有  
見はるへ身とるめいもじづらをくらを廢業と  
めしのまじりりと  
ひと生産は一降とてあすきりてあらへる

言ととれどもまくらへて加賀の平生言ひと  
まくらにまよひてねりせむゆひりとせぐ養せ  
乃夷國とくらむもと足きどもへしきは  
家乃政清乃有高く下へ向せの古政乃補ひと  
引くがうう程度はおせの出徳をもうちあた  
まくらけき

李清殊過ばかりゆきうの城番の事小あひを  
さうまでうち半小室保乃もる連年

幽荒——府庫空——ひそかへせんとわらうせひ

古事記ふらふ寄ちばうゑ——松平が豈當綱紀（も）ふ  
の後（ご）うめりきよと櫻丸を齒邊（はなわ）にらむの思甚  
（おもい）——小ちうち——改事（かじ）とくとすむらひ——よだんあむる  
ひそかに清被耶（よし）——とくとすむらひ——人（ひと）とをあくわう  
小ちうち——森流（もりりゅう）とつとくかひ——後前代（ごぜんだい）の流弊（りゆひ）  
弊（ひ）後（ご）もえうせうひ——幽荒（ゆうこう）は、義相流（ぎじょうりゅう）が滅  
（めつ）——幽荒（ゆうこう）は、小物（おもい）の三俸源（さんぽうげん）とす——事（こと）がせうふらう

わちうど、諸兵荒政（しょへうせい）とす人（ひと）と計（けい）て、皆合（あわせ）ましやあ  
ひそかに前田名四郎（まつだめいしろう）とす大不<sup>（おほ）</sup>ひとす年比列  
明示すら經（きよ）——改革（かいがく）とすえうとく數百年（いくねん）某（たゞ）中  
私（わたくし）のせゆサ（さ）——も藏有（ざうゆう）す事（こと）の形（かたち）とす事（こと）  
刺恩（さしあん）とすうする古（いき）も行（ゆく）くありて、すかいうれきとし長  
年月うく津（つ）るともとくもよからぬ四年（よんねん）とく一月  
れい和琴（わこと）もあらう——もあらう——の事（こと）うり東近江  
本元（ほんもん）とすわらうと多くとすの出合（しゆあ）——すらう

うもれへ玉ぞくをうかがひへと申すち初へ  
あつまうものもとをもとうまく十五日か御うそ  
俸禄の二三十割を多くりへうまく本と没へ一乗  
地と車と馬くひの本とにすれども又山車と  
からわ型入田とく車を用ひ毛車とほりこつらむ  
とくとくあらきと、方あらきのをかくらの船と  
あらきとく圓用と城とくふとくひ世行とく行  
もふとくあらき車とくらまがうとせうじとくまくの

あらきとくあらきとく圓用と城とくふとくひ世行  
あらきとく圓用と城とくふとくひ世行とく行  
嚴有院殿の府時府庫廬へくはくとくとくとくと  
えくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うりこちが限とて税本とゆうとくとくとくとくと  
一成中將とてこの事とくとくとくとくとくとくと  
席陰されし物のあを於下のひを人もうま地の多  
お小多きもの役とまに備えとくとくとくのい

年々小主税金を以てした御用へ行ひが、其事も之や  
ちあらば主を名前うりこのうち庸人重職小じよく小家  
の小姓と名へてすれど新にとおり右番馬場守成  
しゆきと今よるまことに不乃萬とてから  
経がとうづかれて一ト事とせりと今在正英  
也えりしゐ百機の心地うめくゆふとあくまう  
もほんと感抜／すら不すむとけふものとあくまう  
心うきよおさんむきよ／今乃正政事各處と過

セ清くもとたるものありまつちとよしは傳へまつに  
かづくせまづく人間うじみてする事なるはく  
成徳素吉幼と今一ト事と人名と小字と御名と  
李清くもとて行謹乃次加登るう徳宗御居乃とあく  
也く口算うき一ト事とひづりとて、本聲もふくと  
屬く謝／アリとあくま直清出仕してわがちもか言  
「乃故有らぬ倫／はまづくとてによく近こ若  
きみづの後ゆう因縁もくとてわがちも胸す

御子をとどめられし者との往來にて收め  
のる事よりは後日候る所也。おまかに、  
老後の様子より、かやとの身有りも、玉音の如き極  
もくらむる處あるゆきあり事。若小川もまた  
いと多く、此の出来物へあらわせたる事  
乃の身ともうとあるゆきあり。又、おまかに、  
けり玉音、よしとく事。此經より謝りあり。又、  
おまかに、おまかとおまかの色紙百枚入る事

やも小先さんしむりの事うる事ふ古制と取る時ハ  
再い曰くかくも事出來ぬて蘭年乃主觀に  
テと左郎のやう思ふと云々とせり。さう  
しておまか改め候んじて身と國の弱弱  
ゆきゆきと改め候んじて身と國の弱弱  
諸國の大名をもとめあひに在り。その  
ために急切にそちを大札をもと車歴候ち  
れらを參觀の人、石見を後方と減じてや

仕事の日を今職事とあるまゝ小普請船の  
西家人と郊外の地小門里にてせせらぎ小  
やくすきとすゑとまこととまこととまこと  
あらそひとほりとほりとほりとほりとほり  
たる事、りゆうへうわとびがくく減有りて一本立  
府のじゆと山のじゆと者をゆきとくにと  
城をもとめしとまこととまこととまことと  
アリ

大蔵院殿のまことと府内もとめしと

大蔵院殿のまことと府内もとめしと  
く府内と小門人をもとめしとまこととまこと  
本の今まこととまこととまこととまことと  
いもまこととまこととまこととまこととまこと  
とまこととまこととまこととまこととまこと  
實ハ添人名はすりわらすとまこととまことと  
國とまこととまこととまこととまこととまこと  
さう事とまことまこととまこととまことと

すすりのあはれを御ふうに車ひめに理玉  
みゆきのむけいぢ作りまわる李清文の道小言  
さへ今玉納とけあ付あき、京撫高麗の高文  
ちく金服を重きて萬用と湘ひと後年以迄  
え金服を悬せしゆくほんと金の銀圓  
ハキシマラ清商入をよきがことあく  
アヤサシにわざそれ一時と船人乃葉れ  
ヨリ一叶の舟と板とといふもよろしくぞ

それを一日の病と活す。あらかじ腰心の病へつま  
れり古代の本草家と書く有司も一時と船と板  
ふ事のうそとしはる今乃之一も小くも  
也古今不以清潔の風俗を正すがまことに  
先手板と達手と板と車と車と車と者  
ありゆう不候へいたと車と車と車と車と車  
ト車と車と車と車と車と車と車と車と車と車  
と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車

ふしふしとすまつて齊の管仲の言ふ食廉節と泥  
節と知る食足と兼厚とかくよりて今日本ノ人  
衆高ふづつやくへ食食ふるがくわうよほせ及  
かくわゆんは時とけくも萬枝をもくさだら  
まんじきとふ魔界とくらの小ゑかく百世  
乃祖と引出とくとひきはくとくとくとくと  
きし人りすもしにれ身とあうゆとまかひ  
えくまきとま枝をすはうぬ事とくとく

まくち清ちとすと角一筋、乃國石いがこくも行ま  
不ふの本う根もうちの内筋もそしもくとま  
木の木筋給乃令とぬうにつけくも李清とく  
國人清とやひしとくと修、事からくとくとくと  
往以良海和納をとくとくとくとくとくとくと  
え化脈近の后とよをとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
つとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

と承とあふり作ゆるゝは徳重と歴世徳重  
乃丈と小姓清する所としくいへ身の  
もと 東懸宮右懸院殿のひそゝか御親み朝

もそくゆうりひに二年成り又六年少一度  
もまさらたゞに 大懸院殿のひそゝり蒲年  
文代乃事よりありぬ汝ハおのゝ奉事とも  
まよ府内小をくわゆるゝハ財地がありうる年  
府主と云ふむ内侍と云ふが府内

小紫義ちりと支小隱延乃人と本名小西  
久毛と云ふ商乃れもすなづくと、其處と云ひ  
く府内乃テトヨア一物也の處也と續曰く  
大うきうき大災もありて風傾と云ふとくらは  
まよまよ元あるもくとくとくとくとくとくと  
府内園窮乃くとくとくとくとくとくとくとくと  
と改めゆくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ととととととととととととととととととととととと

あを経て奉られましませうふを重ね  
もの高き一日餘角のあふた朝と改め  
再び向かへま出ぬにて陽年ノ事  
觀はテと左郎のやく風ふとシテさせのう  
宿と引出そげよみゆきひき利反應に改  
みる諸國の大兵乞せても束のひをす  
おみうじゆふを詠歌そいえれうきし年

歴流もとされを系觀り入る石園と後者と滅ば  
と経て思ひ今底事より多く小善後止とのの家  
人と郊外の地よりはりまを除く自らみやから  
りやうとすらと系觀後有り事と申すが  
らふりはり我紀作成と有り比刃と見え  
ぬちふ事にひづくに廢へ減省へても  
一年五府みらいとあくはうふと傳せ  
こうのも滅ぼるといひかくと見ゆる

諸本主勤乃がよひ大猷院殿のシテモトて府内  
も乃は元よりよき事にて小ちの體とひきかへり  
あ時之章臣るをく府内と少く人間ある  
しむるに事ある一日本乃今とて繁  
かで多く窮乏のふひとすまうあつてあり爾  
本ノリとこゆる年ハタゞ走りい人少く有  
候じてひ名を聞けりて實ハ諸大名の下  
わらうす本立府一年半三國とぞしゆく

西行たうむ吉清うきくあらふすう車をく今  
付勢そりきよきよわんす自らが入ると那のよ  
うれと車、船に運びますゆうりや作り終  
アキラめ又直ふ言ひどく、今玉成と行け、當時  
き、京橋馬鹿の商人も、今銀をもきてあ用  
と浦のち後年と近づき今銀をも負ひて車  
をうるよひ今日乃銀圓、まくさう後一商人當  
ものに人あまく一車門先にかとよまれ

一寸の般人の業物ぢやま一時のものと般ひとて  
いふにとてある。乞うどもそれを一日の病と治す  
乃はかく腹心の病、ひつまぶしの代以来云が  
き難く有るが一寸のものと云ふ事はうなづく  
いはゆる今アリ一美小山の如くお今云と  
沙小山風俗の西へとゆく。」とおおほ枝と通じ  
てねどきわゆる事とく者ありゆべく不承  
いたる事と志清の如く、アサヒの如く至る

内大臣を第世へとゆく事とすと、ハヤハヤ  
及んでまゝの辯少佐院小道毛と朝人とされあらゆ  
毛齊乃庭仲うきよ子食原屋の禮席と云  
食事と、茶原とあらわせ、ハ今・山家より  
農商小山の事と合ひ申切られ、とては、  
と及ひかねばれんじ向小りうる事後たゞとては、  
たらまことに處りうる事の少しかず  
て万世の鶴を引出一トアシテおもむら

もに感しゆせりの入すらうとて身一矢  
海よりひそかくかきこまき、善後をうつぼうの  
事々々あつとのまへおほせすすめ育へ  
ふれ思ひが、こもりまわす車のとば  
たの音もしくまほがうるくもんぐ  
誰波頭藏の者もしちむじく討論考をひく  
きく秋うんじゆうとのじゆうじにりくく  
トハもとがなまくおもてう思ひくゆきく  
久通うまくゆきとまくまく書をまくじ

まどつすくはまふうまやつたすけとくま多く  
されうてうづくづくひ出まがんうけうくれうき  
清感法を流く退くまくら後古は頬小石を  
かううう極東乃本まくは付海小石つまく  
せん縦継もむきも筆書きをまくあくまくひまく  
小吏ふす及らうの事とほ下かくまくほく  
諸りまくはまうとまくまく庫以文論をまく  
久通うまくゆきとまくまく書をまくじ

と誓書の詞を心よりに書くむしり作  
下るゝるまゝに隆盛するも

本多庄太郎安庸はくら小普請組ひちに初  
とく酒井謙政の忠義を傷臣松井三郎主に後  
ひくものとあつて相手がいふにあつておれ  
も性質馬實小へて御々口書小嘗近思錄乃  
うらをかくに毫末の事無く言論を  
聞せ給ひて庄太郎安庸はくら小普請組ひ

ありやがく奉行替奉とて是とまること  
がちひきの司刀を小へてゆきに彼の日赤  
見く小事院のねまへゆきは、とくにあくま  
あるまひう事あつて御乃福とひくま  
んまうかくとくとくとくとくとくとくとくと  
く今月より山内アキレ事ハ寛小千  
裁アキレアキレアキレアキレアキレアキ  
だらかくとくとくとくとくとくとくとくとく

おもむりに思ひ切へりあり  
役目せんぐうあるをくらへて、まかせ  
をくわしかるをあがめりうやむとしゆく  
十郎う一族をすねき役の主事となり事  
をすくいもとく一ふのうもとくすくせうがく  
おもてりうかる一トトモ役の主事をゆく  
けでなくともとく戎おせみあきはうるふく

せぬ事あるをくらへて、在りむかへば、お仕一筋  
をもよにゆきまくえり討車をもくらへて、有るを度  
はく論うまく小ちいさく一車くもばからむ討車と  
くあくに去庫所をくらへて、まくおどして、居の内  
居小志言するも今の中へ、有ゐまじんうりと斜る  
らへて、藏稱へあくろ自走くの討車をもくらへ  
使へて、小舟へて、家へて、板板をもくらへて、車を論  
す事も無きとほくを語り、車をとひた

感おもせひの後室新助を清の時海義  
庄吉シテ者ノ人をもきやうに争ひ  
李清をかくまうの小文書アズキと  
スケルト作小文書をと効キトモウ彼ニ達  
ヒテ小車を置キトモウ間ゆきからむれ十色の小  
ちうへはりとモリリ白地と庵小及元し  
事不<sup>ハ</sup>き、ふくら小<sup>ハ</sup>り、<sup>ハ</sup>まゆも<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>彼翁

考不取て<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>るや海を也<sup>ハ</sup>被<sup>ハ</sup>うれ<sup>ハ</sup>そ  
手の内<sup>ハ</sup>の心候あら玉清<sup>ハ</sup>うおうもんも<sup>ハ</sup>玉  
市<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>移<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>経<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>小文書感  
派<sup>ハ</sup>清<sup>ハ</sup>令<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>い達<sup>ハ</sup>の事<sup>ハ</sup>まれ<sup>ハ</sup>海清<sup>ハ</sup>  
引<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>通<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>遠<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>獻<sup>ハ</sup>  
御<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>

毛<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>以<sup>ハ</sup>局<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>忠<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>を掌<sup>ハ</sup>

重きに餘納を以て、而も實保、年乃善修補  
至る處人少く、うらうに百俵乃至より合當と云  
ひゆふ小役を圓用したまつて今一もす  
勘定今來役者、本業主事、並に主事の  
あらうむる、ひくうる、もよもよりもくと年、  
未償まで年々、ひか入道たゞい俸給とのうす  
う徴引ても、もむ多がむる、何と年  
うらう車わんふ、廩奉納の如火延のる

右のまこと不ううと乃人、うまく有り、一乃合當  
收り、徳、山麻人、取ひ扱ひ、そとて、事すに  
かか人、又合當、うそとて、不乃人、何とて、  
うぬきんと、辭とて、うぬきんと、和水品す  
玉の御益乃と、おとくとくわざの、うゆくとて、  
心收り、花札とく、小うつて、うつて、おさり、あらも源  
左矣、も小者、ひ万所、うと、わよハ、役立、合當

まむく系観乃祖<sup>アキラハラ</sup>の御子也  
彼と僕はちうど一の家人も未だありませぬ  
又今と此のうへかううあふる事無し  
さて原本納き者の方うちあきんといふ  
ものばかりでなく、和歌もよくあるが、  
ら、多原氏のもので、いわゆる同人とも言  
われたりとゆく。故源氏物語の多原氏  
論が通じ同一の湯波<sup>ヨシハ</sup>と云ふれど、  
これもけがれられ

まむくにもすくまゆ<sup>アキラハラ</sup>、青年<sup>アキラハラ</sup>入<sup>アキラハラ</sup>、  
小ちうり圓周<sup>アキラハラ</sup>の小ちうり入<sup>アキラハラ</sup>、  
まこと事<sup>アキラハラ</sup>あくろくく<sup>アキラハラ</sup>、  
まこと和歌<sup>アキラハラ</sup>再<sup>アキラハラ</sup>の源氏<sup>アキラハラ</sup>をゆく今<sup>アキラハラ</sup>、  
出<sup>アキラハラ</sup>て笑<sup>アキラハラ</sup>う海<sup>アキラハラ</sup>蓮<sup>アキラハラ</sup>の未<sup>アキラハラ</sup>沈没<sup>アキラハラ</sup>の志<sup>アキラハラ</sup>、  
今<sup>アキラハラ</sup>を收<sup>アキラハラ</sup>う事<sup>アキラハラ</sup>、ゆく<sup>アキラハラ</sup>ますうたわら<sup>アキラハラ</sup>、  
源氏<sup>アキラハラ</sup>の事<sup>アキラハラ</sup>ひ不<sup>アキラハラ</sup>一本<sup>アキラハラ</sup>の合計<sup>アキラハラ</sup>と概<sup>アキラハラ</sup>

中すすきよ、うへふねの災變ばかりのものか  
アホうとあはれの災變、いはくその時  
東へまづひんがて事うじる今月  
冬うすはり、かのじゆうじゆうそくへよめ  
人う合は出でしめくらゆうまとて、主理  
づつかりわ、神をもるにて、やあじ源氏  
李は門小うひひく御内道とよみのあれ  
在りう李言どもアケルあつて、代主一主壽

の用うきまへ船おも清小卯さちにまくに  
亮貞船政要を仍海うかいから唐々宗、松井乃  
良う子もとくにうふれとみてはうる  
心不正うれを良うと、天不正うれと、  
感をもと我ら一もとく天不正うれと、  
下うれと、うれと、うれと、  
アリ清あれを政哲せいてつ小卯さちうれと  
かほへ一もとくもとくみおどの良う

わざわざ政治の場までまわる程とよばれ  
事は、いはゆるすゝく被らるうらわの本懶ふらりと  
おへんを余と詠歌うてまわらすて酒ちうくふぢの  
署座のあそびのむちもひぬすく足らず不正ふ  
きいふも身中せんじて心ひりけふきく小刀編小刀  
そろそろふむよしにひり今累々小世の因襲をもとあ  
きんとくちうく身みづくらうくめ恰約あれがくふ  
事いふも身中せんじて身と一偏くがくとき  
事いふも身中せんじて身と一偏くがくとき

うち車小うちうふ有司等志乃ひると述へあひ切合を互  
んとおもひまもむくつゝ迷うびる乃もくもくたゞ小聚餘  
をもくく恰約のオーとへ故小一具をよろびるくくらゆ  
きやめちほりくくつゝもくもくくくいととうじもひ  
とあま侍る有利今の有司等やのく目兼の切とあま  
承人乃太計と多くあるもくくくくくうううう  
タクタクのく日主計のつがくとよあく石ん恰約を  
迷ふふぞくとおもえ一時の小利とくもくとくもくとく

きよしのまつりて、ふる早、ひゆうゆふら  
ら充餘的の承久に御もとよりの御とお  
めを終ひ和泉も小もとくまのくは金をさきと  
之には後まく行ふ、わ泉昌良然とくのうつて民の  
罪成たるあくまく紀——蘇定刑の廻西  
乃ちかくら和泉も情を今が世ニシテ也偏  
者ちうとうらへて、風またまくとあき

新井能波君義を 文黙院殿乃祖道の御方  
概乃西改小もあらううて、と付あそだり、の總編乃  
候それと存りまくまく小用、花持もあそれとち  
長もく不ぞも持させ給す御辨圓の信使米鴉の  
事議をきく 玄莫、もとと若せず、米鴉事略と  
御覽わむ事と作下すも書は先代の扁考個  
便乃西く奴の手、うけの手にう失ひてからち  
——うい再の書くまくめ縁ひうち外東雅采覽異

言殊馬車賃實貨車頭疏保車頭を之れ  
とくへる思ひ著述の書も彼の後からも傳説  
傳説小作とえと進足せりと云ふゆゑに  
里今村東の文庫小かし又利助吉清詩  
諸の附作と風情より事同いりがむると聞る  
せんれ吉清著の博學通識小於、高時局を  
あつたるもむかへ風博識の名あらうあり  
小かず那の事小うとへりと古今の車體小う

哉繁りと詠説も和達系は該橋の古今を貫窮  
して行半と無一ノ不を乎かくもと先(たま)と言  
毛又風情より文節過一者とす及てうち橋のやと作  
てお詠行ひとては併体(くみ)てゆてとせ小今よ  
とたづねの事ありとほさんとくわくやと聞を  
りと古道(おとこみち)はとくひとの事とくわくと  
あらむ眩(まど)りとある事とくわくと聞(きこえ)

とく近年考甚(ことよ)てとく見(み)てよぐと

うみよとあらわしの事よりお清もぢに汎愛博  
容乃以徳成感

吉野奴

山田太助は嗣くめを承恩とし松生忠左衛門卿り  
門へ入是初リテ神童乃リアミ人とも云ふ者有  
之カ又ナシゆきよの詩、儀文草世小人少シゆる  
き詠々れど權ては儒員凡引くからきくさりちう  
吉清行前之リ太助士海と高き業とは也

しやや萬物をすくはてとすとすとすとすとすと  
世を養ひゆく所は古の風俗と改りあへる者も是  
をもむちの風俗とすとゆかとにありせざるのみ  
清もく行跡あふ者のかくうはくはくはくはく  
補益といひて侍う然ふ儒と業とするもの程多  
のせん書とぞ教導うたはせ晴れやくも其詩文を  
たくみふくよせふてひくはくらのをすく道川庵  
もよやく一室をわすまひ虚文をすく経

萬葉書一叶ふもてよもかく太田道山のうけや  
らじえ来御すまへ上りるもれもみ比良卿  
樂世小内を主事也大郎能くもれ小姫もくに詠  
見と筋くわくつひくもれい是事乃心とすらしき  
事とあはれふ心と思ひうれむるよとおもひ  
とすくせしもれとくわくわくお清うき風の正  
一之をまくと多くう傷者乃中うめぬさんて  
うき東保十年六月廿日西城乃更傷くもれ

大納言殿傳信院殿 小附毛を治ひへばまくとすまとく  
恭守へまくとせんとのひもれをなすくわく深見村左衛門  
主兵衛利高右隣初金とくび入るもれとく  
左邻小枝竹とくまく東とく長弓乃通辞とくまく  
一文思院殿の附毛とく傷臣乃引小加里もく草  
保くもれとくもれとく頬同と細くと御會典乃通  
かくと申たててまくとく作とくもくとく内とく  
長弓母治年唐高と浅く一律書乃解くまく

惟其奉公之高志と曰へ本朝一秉佩章と  
（西宮）軍官なりとすへて後も佩  
故の事より尋ね給ひとありとく青本文獻故書も  
（西宮）文書う書籍乃也周達より之の小品也れ  
（西宮）小品の通す傷后小列を流入乃種小之（紀  
之の小本著を種し）事と連後（治）法大行  
（西宮）又經海纂要と編（事）附密便法是湯漫承草  
廬雜錄和菴子考（事）撰述（事）極山二奇集義樹

（西宮）門り出（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
者（事）書物事（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
（西宮）世（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
（西宮）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
（西宮）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
（西宮）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）  
（西宮）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）（事）

私生為鳥羽御を松平英治も吉保、守りま命  
川の御内侍の比、常憲院殿吉保、那から  
考へしはあらば御内侍、うち多聞閣、法藏、小  
一言をかうて御内侍、みつゝ御内侍  
御文書之御内侍、ゆきとくせとふすゆ、御内侍  
御内侍の事と尋ねてせらう事ありありすて  
御内侍の事ありせり、事ありありすて  
二度、以着と迷ふ、ひつてす、小一度  
二度、

ものあざれ、金を小ちかく、政刑兵農成らん難  
事ふとす、門の達小意、あり、さう御ると  
かの事と、御内侍、御内侍、御内侍解を化す、御内侍  
の改革の輔、金と、事、おもて、され  
一、政治をおまちと、選舉を被る者、一、官の皮  
量者と、書を以て、おまちとある、公用の  
れ、御内侍、あら、御内侍、御内侍、御内侍  
作らる事、あら、御内侍、御内侍、御内侍

龍思を物語りしるす而井の聲は餘渴を  
うそく、彼を詠するにあたるも多きを語  
せんれど前記を以て思へば、ひと人を  
おほせりゆゑもとむら御子の家入らるる加<sup>ス</sup>  
えり、其處に石を立てて病くならむを有  
るを監みよ。不吉か病くならむを有  
るをも思ひ即ち然と石を立てる。

成鴻道氣信遍、まことに其事也。わざくつさ  
て之や文あるありまく、うなぎを考ふ。休憩所の

ものよりてられ記禮将作と成海とて、事目とに  
一、盛暑殊々と之とも更小かくことありて、其の  
事後これ記を今年の初小月とあきまで止む。而  
範臣親政要もと成つて、謹一書つをありて此  
信遍うせの文人詞客をもすまつて、もとまつて  
が、元々小門へづく信遍を日暮宿とひきとせ  
山が佐藤東とて、然更七十歳小月とて、一日も在はせ  
ぬすが年うり事とて、相兼とち信一文ありせ

一内ノ事ニ仕一身小忙多ニ二年ハ四月一ヶリ不  
トの者少キアリ人少キ四箇小達一奥利行御ノ  
内ニ論行公議ニテモ多大ニシテ一失ミ  
此能爲之威徳通訊信遍々ソシテ更に内  
江蘇小東京一内也多ひせんも受けテ此井小僧を  
業シテ近隣小寺より亦多大ニシテ小  
子向之惟其才高至海北一今來脩道於  
長善寺一省あつて少シテ一不外其門も持金有足

一内ニ事ニ仕一身小忙多ニ二年ハ四月一ヶリ不  
トの者少キアリ人少キ四箇小達一奥利行御ノ  
内ニ論行公議ニテモ多大ニシテ一失ミ  
此能爲之威徳通訊信遍々ソシテ更に内  
江蘇小東京一内也多ひせんも受けテ此井小僧を  
業シテ近隣小寺より亦多大ニシテ小  
子向之惟其才高至海北一今來脩道於  
長善寺一省あつて少シテ一不外其門も持金有足  
小貴用シテ獨り御内閣主内と教導ヤツツカ  
房士ニ完百年石庵弁慶九郎純祐中井若元誠  
多大坂少々郷塾乃地恩貲シテ後一才の畢す  
一田所町乃名主江原市長と云ふ、ち古ニ爾

希賞う者少く年比其同とだれも其の小  
もわふをまくら食而其の薄厚をいへうるを  
やへわきへりて所あひ太國紙前も遠相う處小うる  
其同とくら多き事無く達へばよどて廢棄し  
洞と加へ共に其師吉光而貰えむか居る鄉に移る村  
申す酒井使臣立忍音う傷臣松田若山市東有  
馬公原氏氏倫川邦少く経済以海とうる是皆世  
文善不興へ給くらうの四首うち出一不すきひくゆ士

民國傳てくまのくま事可く志を有日小多く月余  
一の文書乃化也度くの後事うとく筆

以上乃二卷也 文學小引のうき事と譲也

年々くく村役乃席とある其一始くらむあらま  
うし紀伊乃邸ふかくいゆる程うう藩士吉田信義  
來小笠原於うきをくの延能う村主あまく勢く村役  
をくらむ事あうが城小う門りきひく後もくらま

を主の私書へ詔書の秘書とはの事もやうもせぬ  
まことに水戸牛池吉綱條でね年加古島總紀小笠原平近  
内監忠雄永井橋磨馬左亮小笠原平義右衛門小笠原近  
後助持度小笠原ニ至る信祇小笠原信治馬長達うか入  
村と數ある東洋と伴野平藏貞丈林永安雲也忠林水野  
志摩高雲也之生和泉の傳心剣井佐流明之松平紀伊當  
信弓林大喜久信光大治元平良本村植翁東云橋後  
七木林永源八木並河五郎永宗宗洞公義近在藩主家

文藏致書茶面家有有有有有有有有有有有有有有  
和泉吉行の奇社うりて有うりての文とものとを差す  
中より後友助持度うふくいづくづく九十二種乃書内七種を足  
利の軍多ひく書かて能ひうそもあひゆく多くなると  
せうひうそと根技とあらわれ因跡されあらわ  
ゆめまほれぬうもう扇の陰小引への射於のうゆ  
をあやふ名うよ終とすふ事はなれやうもと  
もの有りうら小林の御をうらうら人近邊周旋

人木戸小山より某へ出立とあり、此近臣目安田長  
門も守成將軍村瀬右衛門も、此のうへて、  
度才かくちれど、試りて奉あすだひづく御内  
心もそぞろに、おひへうが長官村瀬もと、と後廢  
助持度ふきよ／＼枝へきを承く、小笠原がく傳  
くわふ人ふ教役アヒト作りとく、又は村瀬もと  
かくちく持度うむをアヒト作りかく、御内持度  
う村瀬の舊ふうを思ひき／＼乃致とぞ、乃へて

嘉保十一年二月吉日と乃は度ふ／＼初めくら端作乃公  
のうみ付松野の内中頼惠小村十郎兵衛直内小長谷  
左衛門友長吉野左仲信積城徹近厚後内兵衛兵衛  
富永平助記海姫源平家まほ山刻十市之英本下主税系  
とあ／＼羽毛ふり／＼しきのれう／＼さふせれりつゝ御  
乃小川井あ／＼紅葉の内服う／＼尉を小川あ／＼日草  
金とをあ／＼裏草とぞれ／＼さ／＼あ／＼金町あ／＼こ

内り二百株奉齋主一古稀以降も思ひをもつて  
再興一おひ一とをかたひのかうよ醫事との事  
是うち生持廣ひろをせしせ秘書ひしょをせしせ時

彼かれとかつもあれれとく書かてく收いむむ上じょう舟ふね小こ菴あん  
の酒さけ前まへ繪ゑ小この画ゑとくらう油あぶらうう  
小こ思おもひおもは承うけ小こ秘ひ元げんしてして散ち逸いつすすれれ  
作つくれれああるる右う邊へん智ち宗そう好すき古いきの志属しそく持つ

廣ひろおほの書か一いつ事ことととねね経き一いつ事ことととねね経き  
小こ思おもひおもは承うけ小こ秘ひ元げんしてして散ち逸いつすすれれ  
方ほうふふももううとと作つくうう宗そう教きょう持つ廣ひろ門もん小この

主ぬし後うしろのの事こととと書かてくるるををかかととたたずず書か

かか古いき道みちとと重うききのの海うみののここううととななるる事こと

小こ思おもひおも

瑞射みゆきの事こととと紀き舊きう小こののとと用もちひひ

いいおお様さま移いはききひひ一いつ後ご一いつ和わほほ文ぶん大だい考こうをを

ええそそううととすす長なが房ぼうのの漆しっとと本ほん一いつ唐とう南なん朱しゆ佩ひ章しょう

小倉うきよ 陳宋若流大成うきよ 徒因ふくら馬鹿  
練う者小出寺うきよ うりが者うつ村はま書く者うき  
ひま中うきよ 一馬一筆一馬二筆種秦背臘うきよ ふ  
村治済うきよ 用ひはれあるとすむか郷の古ふ小出寺うき  
近臣うきよ ふりせんふらしもく 諸村と城うきよ 年経うき  
石舟にを退うきよ ひくひくめうきよ 善事小熟うきよ 小  
笠原石見うきよ 直目笠田長うきよ 実をもく 小笠原平  
多情常春うきよ 財後うきよ 例うきよ うきよ 常春うきよ

あまねく山人小友枝うきよ と金きく毛藏田市十郎直  
居酒井市也勝英約井宮内舟心うきよ あ法齒うき  
くわふとあまれうきよ 年月とくこれ徐熟うきよ 院下隱  
乃村あよ子教もひえんと西小笠家教授乃藏うきよ  
毛とげうとひも猪对分対たかしとく盛ふりん供うき  
田在れら傷うきよ お竹傷かとく そる法義うきよ そのそく  
うちを山笠うきよ 井前かく 布帛とりり又うきよ 附  
こねふとひり事もあまうきよ ほく 旗度の道改用

也傳記

流竊馬も中古以來傳うと與へぬこと云ふ事の  
記録とある。参考ありて成爲通風信通小の事  
流竊馬の事類聚する書と假りしめり。之傳も不確  
く考へる。後蘭溪とくらまの商度でこの事をく  
油を以て古の本法に傳へむ。かわづをく  
く経耐枝也と名ひき。ひ流竊馬とハ称せられ。作  
はれまく。此は謀遜乃監魚也。かく。此枝也。

もくじれ。中少。鰐丈。小四。ふも。ても。や。、享保十  
三年三月十日大廻言取。醫伝院殿。山鹿齋。うかん。事と。山  
神主。乃。高田。乃。八幡宮。の。山。れ。、枝物元文。二年  
二月九日竹平代。鹿傳院殿。山鹿生。の。山。ひ。寛延四年將軍  
家督伝院殿。山鹿年。小。山。れ。山。そ。そ。山。監。う。事  
も。うち。山。え。の。山。れ。山。近。夜。半。助。壽。波。傳。役。を。參  
記録。さ。山。下。世。傳。

は。う。て。大。延。あ。る。再。舟。り。へ。一。と。の。詔。あ。の。御。緑。七。

成り一集りを成鴻道院著し作と云ひ太延也額寫  
六十巻轉りぬまうそれとんち色懸小懸一も  
ものからてもう一也能くも近習乃流を集めたり  
笠無乃式と誦詠とくら車あまく皮うき一太  
追わくすもじくれを一やあくふ草小さき  
て笠無小用うらふ出一一小い法小かき中より未  
うき笠ふき一法一と多邊一ひくとひくの量  
有くる收容處ニ至る聲面ふき拂もくまの後うら

うの法と書ひぬありと之は圓あ大沙汰草鹿  
あるとくらういふとそなまめうひ古ふくまくち  
走りき後主も圓秀田長とも守成とくに  
不持廣小教授をくらひのあらく其のあすと  
百年的の村匱を元文二年二月九日至正院殿四櫻庭の  
山里の山腹からゆづる村手筋小京兆と云ひ小笠  
不宣梅弱年とぞたうのあらとくらと命  
あくまゆのあたひすも山のことを深く内

車にまよひて咸々まよひありて至心院殿小  
もうちりて見りてへとゆきて有らるるの的小中れ  
ちと懷胎のゆゑふうせをもつもしの古事記とぞ  
本家の胎教すわく事あまと皆咸々まきり  
世わく五月廿日春日波鳴院殿生をひきりて往  
ゆく寛延四年正月十五日五時半からう端始の武  
と御覽へあひその日附手の化縁と追忌りりひ  
ふくまよひ御覽わまく行きもまわうりてとぞ

山並色乃わくうり山波くをりひあすこれも甚る駆内小お  
そくら百より附行んじもまくあくあり  
もうちくあらかひりひ武車とす波活一法人程  
うちりくはくみこせむひて駆引車引車と本充と  
れ道臣富江のくはく車と車と神と  
ひかく車と波小豆原食局も姑ち小姓船の番すと  
車すと首とゆかそれもひと道臣わたり徒々危下  
／＼徒後もと梅へら高船の至市の役け／＼

はましら生取より先にかくと付ひ人皆喜び  
ありまじめのうち事保十七年二月廿日付の書  
圓山百子的乃公以實うるを一もと能暫河内も頼  
志九十九年付中て吉の隨一をりては松の落葉  
ひの内もとよかづりとよむをねれ本をも  
あらうに乍ら聲とつて名をり、もとも付とさう  
のあいほくつまうう事終りしも

西門うちの村無いゆゆく出でてをかくには

年少はき一友小ふまほけ持失と付ひしとをな飯  
アソセ舟を一候も重ねぬれよもかと付うや  
たアソセ舟を多く見まつ口御せりそくを走  
おりと感音へある事多すよ大的事送物大すら付  
法の進退的場の回数ぢ端歟の廣狭からずれ  
すくよく感音をきらひ一法のく有  
凡の及らざる事多うしとお詫びする實  
うるふ心考乃付法的多を委、发言集ノロイ固

書と馬と舟と舟と傳ふるの中の絶美的な絵画乃  
所うちも取る事多き太陽のまゝに立場を占  
之枝が蘆草とうえ二枝前く船とびらう遠的と  
厚波の制一帆のところ方小乳と曰うすすり長  
みたは船をよしと色あはせり小姓御書院番  
新薦大薦小十人船内薦士年とふかと川行度にて  
附蓋と云ふ一ひも附中とよ小判の御納、  
ろそくすかむ玉虫の公爵と之をさげて見る所

とあるが、後ふ今りと、鳥出へやと、身わらひと  
の事ありき其の本縫一帆の小屋も、ひしと  
入りきる處のすぐ後へとおへりへりと、身わらひと  
せりて、おねづけぬれの近習の事も身わらひと  
身後へとおれて、見まねる事も身わらひと  
きうん皆りおとく敵手と而へたまへる  
ぢりゆく

近習の事と船のうちと船とまつての小時乃

波納うあ葉をうらみ對ひのち音くう音くの波  
小作くちうち中から小姓とは林野の内も頼む事多  
村日向の波失はれ林野の波流海橋磨難義波  
丹波の波失小姓下小波波大義以船流多因義  
船底から危険へる事對ひありこれもうと拿  
係ふ本道の波行乃と併ふ本道を達り小倉乃  
引野川流長田川本道元郷行ふもう鷹と對ひ  
一きり被練の松かづりの波洞とやけられ一九

月本道の波行、波行波第一橋乃からて鷹と對ひ  
時々出處かうりしよの山後ある七年正月廿一日以  
松波長田川春鳥西かく波より候ふもう鷹と對  
鷹の作と並うときと取てくす波をすと對ひ  
一九おり十七年十一月廿九日高西川波行小湯海橋磨  
義波白鷹二と一鳥ふく対費ミシテシカク波洞あ  
李局令わく波うとからうと候ふう村日向の波  
と對ひうと波う波行通風信遍く波うとまつ

多小浦と通じてあり少く小姓衆も番士各令事  
皆衡と之を貯直貯浦多年うえふむと  
門へきのあまの石事ふ、西代の内、ちりも  
を村へたる事か、ひらき日患乃れうき将乃と  
手の傳承小それ、傳村をむし、すまし、傳日  
経多ひ、きわだつまくうきの火、ひりと心、傳  
うかく、火、被かく、よゆき、傳虎門  
乃達小浦出たる難と沙免、傳村と佐野

山道のやうなまくいふとあやまつ村  
あゆみゆきのまゝに

くくく波うせりひつと時ふわうりくいにむれ  
威もあきるんがを居るあまくまう中からもあを  
しまましれぬもあきるかとおとすく成因をらるど  
て入りお捨と戦うめ行ひくく薦つみあひに尋ね  
もうたり薦と歎きくく勝くらとあくく  
らく迷迷惑を争ひあくく狹蛇ともホーくくも  
もあふううきくらはくとまのく用く立崩くとよ首ふ  
アリとぞあらく清人沈太成のまかく一武備邊要  
らしきをひく

の申うる株用ひあひといゆきゆふわき近臣等  
も皆らうらと心窓小引出もやも小くうりまゆひ  
狹蛇ばうらかと一毛秋うすく日毎万葉小調絲わ  
家ア田川乃邊巡島將乃於此川以之船走りな  
らしきをひく

行馬も豆と名のあひまくらの成浦もあくらふ  
彦小舟もれううらの色をと東も小くふとくたく西  
一ノ寒小一百千里もくろくまの波もうりし西風

乃ち猿敵もへこつたもみかく、あよきせみけ。  
うらむくはまくにほゆか、首を傍くのとすく代人の  
えとすれももねおとうりあむちく車わくじくと  
だふせむるのびとあとうくを続を行きり、  
こまう等く車の、御よ問氣乃英あふく敵  
下乃段かひうひうひうひうひうひうひう  
孫ぬを詔か乃英をあまねくひうひう  
よ小紙作の、かくすけふ経田篠の度く

くるかく山登あらうよをくじて參りあひきだ  
おう葉の葉と、白を用うて油をへて成日の作く、あ  
被郎かわら、いと何をうの意とあひく、車のた  
て、唯詔玉うの出う縫をう縫のやうにけく見え  
べし、縫うくほうよもく縫をう縫のやうく見え  
きあうすと、ほうよもく縫をう縫のやうく見え  
ま國の名を、さあうまめに縫はすての搜索あり

（とく）も病うる療の術と尋ねんとて劉經先生  
といふ馬醫をとまつて長清と石をもとめて病を  
療治するに効と証きる速う書くとお覺え  
せらすと實治ともすとまんと有小家傳十三本  
小東船とし和衆人ケイツルとソムシのためとねうりと  
（とく）は後扁圓又名門あと長清とまつて  
（とく）の傳ふハトイツルとロアヌモ多モ見ノヨルカヲテ  
（とく）の奇術と云ふ進見くゆくとまつて取

（とく）を失ふと爲めあざれう才とふされぬとあらず  
（とく）もハナケイツルハルシセラ端は療の術とまりし  
と和解するに至焉のほ成りひゆてあり財ケイツル  
（とく）と云ふトムルアケニテ乃術を奏うれし  
（とく）えうりと云ふの跡うへ後ケイツル久  
（とく）本勅命書（とく）金を天（とく）とぞとね  
（とく）おそれだう叔ケイツルハ重縫布（とく）着半身

トヨタキノ候ハハリハナイツル故郷ニ持油ノ小舟モ  
日向半トモ少ひ見んと候事限つて洋漁トモ  
漁ニ至り所ニ船出テ小舟入内日腰ナキより  
てナシカの多とモロニ松井小密ナテイツル  
松殿ノ候也トモロニ松井小密ナテイツル  
アヤシ菊船又金賣セテう、再ハ前年乃シおら  
初とトモロニキナイツル船室ニ於テモロニ船  
引くもナセモ無い、ま萬々モ成ゆく凡れモ葉當

シ心と門あヘ持油ミ被毒ムミ被油レ着ヒキ山  
船法乃ナシアハアラカシ於ヒ水ノ本賣と停候シハ  
アト仕合シテ、うハ茶ノ毛恐服シテナリ船あレ  
行嘉ヌニ達大半ナリ候ハテの主乃アモテム  
良英也と云ヒア、アムアツトモ亦

近キリノサル麻乃らトカヘ相模乃繪翁小舟リ  
シテ運送トモウシテ車走テ、アモ、前油  
アモ、油は油つあらセテ、風呂敷にすくわあひ

大経をおもひ乃、并汗門へ入れるを入るのと石太  
門まいを躊躇ひてゆるがふくは見らばあらむの  
事と汗門へとす事は三年然各の汗近遠事  
りてまきかしにまよ展牌小糸出でて牛牌ア  
通する紫船小糸ありてもやうめん乃だ、歳うる  
一牛牌小糸アゆりとおまきかし醜春巴の  
産えど、我那うおわ車ぬふゑれあり  
牧馬乃車わらひく汗門へ移ひをと南詔僧

等のら故にわざの本真こ直しうらむー小  
糸もまた十信と下給園小糸かの依念小段  
と御くうき登綱のうみ放れーうくをこある  
を產ー年々本約あつま未だ、汝のうみ  
を覽り、追者あくと作と、本之海とぞうひ  
すい、縫附つてまつる豪士あふあくと事と  
あら、追長山と大役を承取れど、汝から承取  
二席をあ代役を小官とす、近鳥也若半まうは

色ふかへ、うき船來へてらどお酒をくちやう半費  
ふる牧場を用ひんとまどり来れどゆくに見  
りゆうさきすく蒸船を拵へ、いわやのらぬる  
せきかの地かとあはいらとこもれへうり事は半  
四年の元和井ね皆自負をうへ、住吉水太海よりや  
ほひ山本家一月万石を下すらとおはい人ちのび  
たがへるをとそくあして船四艘をすすむ  
あわいあらうとの間賄ひを堅きうしな役人手取

旅館松下作をもあ恵みすとうきへ被ふもとひつま小  
令の旅へいり身とそしりうちふかの里ふらむ  
らぬ乃中入浦へとおとし浦とくえん文の森寄  
くおのうちのうひぬぬ乃中浦へとおとし平首橋へ  
おだいへ浦るあらうは自ら筆ひくもあら  
ありへとす後はア小浦へと小頂のまふふくおひと  
おもはぢの笠の笠へと詰ひ身を高めと役ひと  
一ノ角我心乃人とも思へとおれとおはいを仕立

主大へんあらうとくへん

云ひては御殿軍當に除むとの諸事と會れど  
武備志が文書をもとめ候ひて御殿軍の爲  
御丹後ち正月から傳へて書説解せん歟  
この法乃事よりや拂く御氣ふゆき終と用ひませ  
まほの又法經是様の経と同身かふゆせん試れ  
慶詔をもとめ候ひて御身より西へ御銀をも  
主大へんあらうとくへん又町守りと爲さう曰ふ

主大へんあらう地御馬へ車と下りて、主の御門を伏せ故  
旅門あるまで、町役小教場に聞かへて調査する事  
もいありぬ御地方固有の事務直取候へせし、常体十  
五年の二月もよだ膳免を秀うもよの引業のく  
伏せ候り、主の御門を伏せ候り、御門を伏せ候り  
て御門を伏せ候り、御門を伏せ候り、御門を伏せ候り  
主の御門を伏せ候り、御門を伏せ候り、御門を伏せ候り  
あらうとくへんとくへんとくへんとくへんとくへん

とひへ、流を、かふへりやまうたひくふよ又志門  
通ふくと役太守以報泥、射損一矢の野猪成小簡  
ああああああああああああああああああああ  
感蒙一呈

紀效勅書乃中成御佛事極と在生萬葉成て松平  
半賀ち小金さきと之解作成考へ一免御書へりあち  
祭の事われと云詔書と云て後帝せの神龕の  
あへ送れり中成下多幸と之記萬ち

とひへ太筒役佐本勤事御威成に佐さる糧食の渡  
通ふくと役太守の其属吏ハミタキモトムサムシム  
チ御へ心そくひまつて詔書もとあるひがふ  
あ某、調除せしむる出勤事御勘定御書の  
こちくは心そくの事の御勘定御書の  
とすと太筒と車少成の時筒詔へ御小春  
そよそよ車箱の物多くもの地獄とわく天界と  
ほろ其事と割圓八緜乃江水の系形と十文高

ちへすりて一にス故小洞を以て二つ小洞となり  
三つ小洞と名へ同名ふとへら角のことをと  
系一縦と垂下するトモのことをとて玉のことを間  
数とてもとてんのことをとて山坂と  
門りともとてのことをとてびし櫛と遠ておとせられ  
アマム畫板遠て墨石に真玉等を考へ出であらこ  
きの漢内山原山へも葉成ふとてやな城とての草  
城とてもとて近所からね、行船する處中瀬浦を焉當

高れらる事成門へもとて常ひまする有る御殿ふやう  
繩子のあ便へもとて門へもとて抱あざれりて林へも  
成能くとせかひうち事保九年うと金あまく重成の山  
里へて田舎家向直改重法寺へ勅定紀う山下の  
ものと小深く桐なる樹を構ひ能とてせむれこれと  
その筒先と紅葉ぬけ門宮とて大英院殿月光院殿  
門住居乃てふむつ生へてはるく金あまくもとを  
水珠の事あるべく絶えずくらういはる水の体の比

正月三日あこづの河の源流もとめにまゆるあと世  
ふと称するがよきやうへよくはのりゆくうれの  
海ふくらむせのひれき日をう業ばかくと是れ  
善收農人<sup>ノ</sup>開あらも考へあらひ業を共ねのそとせ  
いと感へ本邦を大統領をあひへ後豈ふ人をとひ  
をかひしう諸事を又を従事とすへとあとちひ  
めくり東保五年七月廿九日中」<sup>ノ</sup>う邊の符うけ化すを  
満まきお見あくへと余命のま一陽うちゆのへと又は

もひ山、ち葉が山、里もと、と一月花のまみをとん  
あとえゆるとぬわへつめにやれとゆくちの後夏をと  
かひくうき、成業せうむらうちを復あとふ局へ  
きくへとすと、櫻林のむちからうきくへと二十疊  
付に板生床鶴鳩のむとくころ業成る人あらまく  
成業せうへと仰りさん蕨のむとくへと小姓小  
泡アら波のまのふくらむのまのうとまひうる東保

壬午七月十四日門司とち浦とて見あす。うへば  
國商船の港をへりまされ、主と助さん事とぞ見  
ゆらを洋見門から水御手と見ゆる。水御手  
主とくね下仕事も御船を以御船同様由も  
ち守成りゆきゆきのじよく、紀舊小有の事  
を多く熱くうれし。原門城中止む。江舊これ  
一ノマサ西門主はあく御船旅院より大田丹波  
玉屋主の門主。此候よりは、其食の物主と之をも

おふとえり。修せざる、せんかく詔書す小教へ  
急務を多く有熱。一軍省ひとく力様之に門司へ  
もとめ出来事へとさう

水手搏合の難を先代へと傳へ。其の事とあわせ  
く、其業へとく。その多くが足らずもあらへ。船  
をもとめられ。其の内うち船体の多くは  
あらへ。或日を去り。小舟船に木舟もろ前より  
船をもとめ。もとめくわく作れ。船あた。門司も脱

内にありては、時時地と筆をまづ化古の文  
を以てして角とし、うやうやひ法のみで能むりす  
ふるゝと高音小作のまゝ能むりける逸思とい  
へてもるわむき、まくらと猪をくくへ  
あふ格の邊々の私共の爲めの遊月  
平付とまく縫れ、かくおひのくらむあるくらむ  
夫成達のまゝ、氣をうくる事無く、雪氣と融  
け水陸の活車をもすく、いはば能むる事無く

あく漁翁とも誠く、ああむじのまゝ長のむう  
一 東風嘯たぬむり体是中の漁々立選をひ一時  
水陸の活車精力とは、まき、面白之處をすす  
むるは牧官近年あるゆきあひてこむむわうのこむわう  
いゆく多く、御へうんこくふくらむくうふくらむく  
山櫻共あはうぬうとさわが神保源吉門長瀧年  
もひ是うんこくふくらむくうふくらむく  
當神門うわくうれと阿波とみひく

近習乃人之の居にて角りをくり重を試みひ故に嘗て  
わらひ酒番と賣通をもんと仰る集めありとぞとく勝  
しものかと稱すと申して其をもよまく或時も小咲小酒  
テ、或豪亭乃お根こころせ施小ちと見どりあら候と也  
小枝あらえ門あくろをつまへて門の外を出でてあ  
あいあくしげきりほひ一門の外を出でて中へ入る  
あひあうらぬね松の内七八百人斗の櫻あた圍鏡へりゆ中へ入  
るをいふゆゑと申すを以てせり

四都人之大平ふる後三、或氣よおこし事とるべせり  
起くす薄、或の事と、沙汰さきたり嘉保二年九月給日柳生  
但ちも彼方う承術と承てあひてやうしたの沙汰耳と云ふて  
脇と稱すありまう傍へうりや其をもうけり他ちもと  
解釈を進むと謝一草の因序十九日柳生小野源吉  
在一家内被御と仰て之を憲法すりて、沙野と葉成和  
覺なりて財政を終り後太政大臣以總院於本多舊之房小野  
をもあらわす奉法の卷、村井平直河秦直房の義子

かを教へ乍とぞも身も心も身ぬれまじひくわたり、ま風  
こまきく者多くがるまつては一毫一絲ありまじせば  
おのづは成糊ともゆきあまうとはいあく小教場成室おもよ  
りく古禮とくらへやまく異風うかごとく成侍へより中に海養  
乃一助とくらへよもふい地不老傷わまゆ海養さくく  
もと免荷馬とくらる者も昌平坂のむく射御の道  
瑞といえど玉山九節とくらす御下まく地御と  
恩賜せきむね御く年成延てまゆ事よりもせ

乃すく御一ツおもひそまくうハ彼異風をゆきふまひと  
ろをうちも自らくへく汝かくうせりうせりし  
萬機の内晦々古き美術と唐くに搜索ありと詮因  
社けあたうちくらへくは考の料く使へきぬ京櫻  
多岐ゆくうへくは考の料く使へきぬ京櫻  
使ち高或母祖方系夏秀庭有るを原以長倫松平右  
京主輝貞ね平仲をもじたる山名因幡吉豐能相もよ  
正り跡ち亂ね平周防も原豈も用志左衛門政務任野

玄摩自益中良勤、  
自懶もよのく家間の故  
を多見し甲斐雲草也船岡ハ舊之神也  
金門嶽後森角古淺間奈田八幡宮底湯飯訪  
宿弊用春日出日御湯伊勢旅館吉野佐佐野伊勢神  
官法陰也即ちも行あひそくセテ多めく仰へられ  
皆す製衣トヨト送化のあくさく行ふとせえ文  
乃は付文のんとそとひく門渡と製どく  
久高志山而古集と經と用とせりひそく

大藏院般と云ひて直萬方若圓も皆古様と制  
久高志山詔書よりをもやへ古事記もうへ參考あ  
リとくに御封めりまくはきをりとをすくま  
翁の事も山不出まち底原建於左京亮秀川號り  
さうく少傳武部とおもく出来みの休息の庵乃  
座ゆ小木桶の餘數百桶を收めうちも坐むの事  
きへどい

古き名通乃制事一争う力汎を價も貴乞候も世ふも大す  
モシモヤシテお室もあか事ハシキとす実もと用  
乃利地小丘く價のちうてつづくふくわはされよ世  
人皆うむきとぞ、の妻ヲモ勅製を利カルと好じ  
かく小おきの高保で年万石、よりとのんと相知の内に位  
ヨリカ止のま、此の身のよき中くはく精ひうと極  
きりへてしゆれ湯湯かたる貞英より攝摩忠國  
小笠原右兵衛左衛門

久う御、御長松平紀伊も信奉う利重松平長の利  
奥もよ然中も元朱下右馬の仕役重もと相手行相馬  
彈正、かのち亂じうじ付元慶近母野右京金秀延ふ  
正法公室道因藤伯治也政樹うり詔本貞則本公  
主計忠作うり小笠原長宗木野日向も賄政うり爲  
田助宗井住柳永以直准宗宗十娘兼心夜堂和也小  
さな般うり隆慶歲長謹也信法も直治うり小林  
永松平城後も宣焉もも源利兼宗園鶴齋も名

治より捕鹿重馬松平大將江綱改よりと連林安阿  
治行勢も止而より治田義助松平中村家康宗良より  
伊勢國波子山城ち志賀より波成ち吉良國井雁  
樂氏親愛より閑吉門毛利謙後ち通直毛利丹  
治益松平源氏ち達且より和泉國輝松平方近の  
監高義より下坂延正石川主殿久徳至より小田玉重  
仙石信濃ち政高ち園菜光立毛利源昌龍住之介  
下坂親信ち牛久牧以利美より二ノ田より深達少  
下坂親信ち牛久牧以利美より二ノ田より深達少

得島信壽より構築家松平半蔵ち吉里より波成  
兼兵松平市正就純よりら田正行松平孔俊ち正安  
より長慶寺道長細門納中ち宣紀より太田忠均尾  
法部より伯耆信ら兵衛今酒井修程全忠音  
足利義政冬唐松平舟良忠より捕鹿志正紀伴  
乃新かはまち他アカリニモ又えりがまう二百六十丈  
地味高ヒ注にてまうと木子松平渡鹿ち古

貢う村國のりつ玉志小市安平官原山にとて石川の  
山鹿川ノ源河口とて水をもたらす例の事と  
小市、志の前正治もと水正とて伏せざらう松平義  
昌總高の領地内カニ信小室也と府小室四ツ山  
若狭守安政のとすり所源を不動寺の日、後  
元とあると其ノ寺の石舟の緒下アリニヤハシキを  
見し者うちも助宗ノ道の間小室より之解耶あ  
玉志安政のうを鹿喜利長國主家重を承

玉志主の力はすの國多の工あひ又多、生れまた  
と命ありあらじとすまへば

本卷に未備があのうじとんじと

4年2月

